三―七世紀における中国の都市

宮川尚志

【要約】秦漢帝国の瓦解から隋唐の中間的統一に至るまでの中国の都市の有様について目につくことは、(1) 長安・洛陽の如き旧都は何度もの破壊にも拘らず、新しい支配者（多くは遊牧民族）により修復され、漢代には地方都市にすぎず、政権の分立と共にこの時代に発達した鄴、建康の如き新興都市と共に、同時期の欧洲にみられぬ巨大政治都市の外観をほこつていた。(2) この時代の国家には政治上の首都と共に軍事的副都とがあり、両都を結ぶ交通幹線がその国の政治経済の動脈であつた。この二都組織は当時の国家構造、即ち名族政権とこれに対立せんとする軍閥政権の争いを反映したと思われる。(3) 戦乱特に遊牧諸民族の混入により、都市の機能や都市民生活にいくたの動揺があり新しい事態も生じた。本稿にこれらの全面にわたつて述べるを得ないが、次の如き二題を主題として全体を察するよすがとするに留める。

一　鄴都の盛衰を中心として

鄴はもと齊の桓公が置いた邑で、晋、魏、趙の領土に入り、秦をへて前漢では魏郡の治所のある県となつた。（高祖一二年、195B・C）前四世紀初めの西門豹・同じく終りの史起によるかんがい工事はこの地を華北における開発の一中心たらしめ、戦国魏の河内として経済の要地であると共に、軍事的にもしばしば争奪の的とならしめた。前漢書溝洫志の記事から見ると、この地方は黄河に近くそのはんらんをこうむり、大水がひいたあと、地味がこえるのを利用して民が耕田してかなりの間、無事なので気をゆるして家屋をたて村ができ上つた頃に大水がでて流されてし

まう、改めて隄防をきづいて守る、といつた（哀帝の時の賈譲の奏言）有様であるが、かんがいと排水とに多大の労力・費用をかければ、それは五倍十倍の利となつて返つてくる。東南の内黄県には数十里四方の沢があり隄がめぐらされ、その中の美田を太守が民に賦している。（同上）あたかも宋代江南の囲田の如く田園の利により豪族が勢をもたげる。後漢初の内乱にこの地が更始帝と光武帝との争いの場となり、鄴中の豪、李熊兄弟が活動した（後漢書五〇、銚期伝）ことがある。122年に魏郡太守となつた黄香の伝（同上一一〇、文苑）に、郡にもとより内外園田あり、常に人に与えて分種せしめ穀を収め歳々数千斛に至つたが、彼は田令に「商者に農せず」、王制に「仕者は耕せず」とあり、官吏が私利を百姓と争うべきではないとて、独立小農民に賦し、課令耕種せしめたとある。189年（霊帝中平六）冀州牧の韓馥はこれまで高邑（河北省柏郷県北）にあつた州治をここへ移したが、彼の実権はまもなく献帝初年の董卓の乱に乗じ華北平野を根拠としてこれに対立せんとした勃海太守袁紹にのりとられた。（この事情は魏志臧洪伝注王粲英雄記にみえる）民人殷盛、兵糧優足（魏志一注）をうたわれ、天下の重資なり（袁紹伝）と称せられた冀州は鄴を中心として再び郡雄争奪の対象となつた。即ち191―202まで袁紹が確保し、彼の死後、その子、尚が、宿将の審配を守将たらしめたが、204年（建安九）強敵曹操の来攻をうけた。その攻城の有様は三国志魏志六・袁紹伝や水経注一〇濁漳水の条下にくわしい。黄河を渡つた曹操は淇水河口をせきとめ、その水を鄴の南に通ずる白溝に注ぎ洹（かん）水と結びつけ、糧船を通わせた。土山地道をつくり、四十里のほりで城をかこみ、一夜の中に広深二丈にうがち、漳水の水を注いだ。審配は西方の上党から物資を補給せんとしたが、早くも北方の邯鄲（かんたん）などの要地をおさえられ、糧食つきて三箇月、袁尚の来援軍は軍使をつかわし城中の兵に降服をしてよいと伝えたのち敗走し、ここに鄴城はおちいつた。審配はその剛勇と最後の壮烈をたたえられたが、魏志一一・王修伝によると、袁氏の政が寛にして在職の勢ある者、畜聚多く、魏郡の豪族である彼の家財物貨も万をもつて数えられ、みな曹操に籍没されたという。もつて鄴

が後漢以来ますます豪族の根拠地となつていたことを物語つている。

故に曹操が代つて人口三十万を算した冀州の牧となり、鄴に治すると、科法を重んじて豪族をとりしまり、守令の選考にも注意を払つたわけである。

冀州は穀十年を支うと称せられ、（袁紹伝、韓馥の長史らの言）袁紹はかつて献帝をここに迎えんとし、これに反対して曹操は屯田の中心、許に迎えることに成功した。（196）董卓も自らその冀州牧を任命し黒山賊于毒と結び一時この地を占領したことがある。政争の中心になると消費人口の増大を伴い、202年にはききんで米一斛二万銭した。（王粲英雄記、太平御覧二五引）曹操がここを本拠とする様になつてからも政治・軍事の中心としての色彩を加えた。

曹操は211年（建安一七）、魏郡の領域を増してもらい、翌年東西部都尉をおき三魏の称がここに始まつた。政治都市の治安が重要性を加え、鄴令になつた楊沛が曹操に答え、「心力を竭尽し科法を奉宣せん」と云つており（魏略）西部都尉から太守になつた陳矯が、数年間未決であつた千数の囚人を論決したこと（魏志二一）が見える。早く後漢の順帝の時、太守岑熙（しんき）がこの郡を「無為にして化した」（後漢書四七）とあり、魏の裴潛も太守となり「これを撫するに静を以てす」（芸文類聚六七引魏略）とあり、かかる黄老的行政のなされるのは、風俗の不良なるがためで、隋書三の地理志に、「魏郡の浮巧俗を成し、魏郡清河は天公もいかんともする無し」とのべる通りである。

魏志一一引魏略によると、210年、三輔（陝西盆地）の乱により多くの流民がでた時扈累（こるい）という隠者もまた徒民に随つて鄴にきて流行病にあい妻を失つたとあり、こうした流入人口が都市に生活を求めたことと思われる。

曹操一家の創業は許の屯田に始まり、つぎに鄴の軍事価値をにぎり、終りに後漢の都である洛陽の都市文化をえたことで完成した。文帝曹丕は黄初二年（221）正月に五都（長安・譙・許昌・鄴・洛陽）を定め、石表を立て四方を限り、五都を含む、河南北部、山西の太行山脈以南、山東東部に当る地域を中都之地となし、天下の人民に内徙することをゆるし五年以上の税役免除を与えた。（魏略）即ち

天下のおひざもとの人口を充実し経済と国防とに備えた。元来、前漢では首都長安の外に、洛陽・邯鄲・臨淄・宛・成都を五都とし、後漢では旧都長安を西京・西都とし、洛陽（東京・東都）と並べ称したごとく、数個の都市を特別重視した先例はある。漢代の大都市の中、春秋戦国時代にさかえた邯鄲と臨淄はすでに前漢には衰えを見せており、宛即ち南陽は漢代の豪族南進の拠点、かつ後漢帝室発祥の地としてさかえ南都の称があつたが、黄巾の乱の打撃甚だしく、（けだし豪族の圧迫がつよいだけ反抗する農民暴動もはげしく、この地の賊軍は首将をあいつぎ数人失つてもすぐ代りを立て陣容をくずさなかつた）さらに袁術の暴力によりあとかたもなくさびれた。成都は西南の中心都市として蜀漢・成漢の都となるが、西晋末の乱の後は何といつても地方都市にすぎない。ひとり長安・洛陽は同じ様にひどい打撃をうけながら、その後も新たに入つた胡族の王朝の首都として再建されているのは注目にあたいする。一方、鄴と建康とが新興の国都としてはなばなしく史上に現われることも重視せねばならない。

魏の五都の中、譙（安徽亳県）は曹操の本籍で許昌即ち許（河南許昌県西南）は既述の如く創業の地である。五都の中、実際、曹操が漢のため都としたのは、許（196―204）鄴（204―219）洛陽（219―221）の三都であること王鳴盛の十七史商榷四〇の許鄴洛三都の項に説破する通りであり、また三輔決録に侍中韋誕が、この三都の宮観始めて就るや銘題したとあり、のこりの長安と譙とは遠征の際の本営地となつたのにすぎない。

208年曹操は玄武池をうがち舟師を練習させ、210年に有名な銅爵台（銅雀台）をきづき、愛子曹植は父に従い登台し賦を作つた。曹操の直系部隊である冀州の士家十万はここを中心として住み、関羽と決闘したことで有名な龐徳（ほうとく）の家中もここに住んだ。（魏志一八）田疇の家属・宗人三百余家がここにいた（同一一）というが、一族が都会の中で一里をなしたであろう。梁習は并州の高幹（袁の党）を平げその地の豪石・丁彊数万をここにうつし（同一五）また漢中の百姓で洛及びここに移されたもの八万余口ありという。（同二三・杜襲伝）人口増加が住宅難をきたしたこと

は少し後の事だが魏略の丁謐の伝に見える。明帝の太和中（227—232）彼が人の空屋を借りてその中にいると、諸王が彼の先占を知らず借ろうと思い入つてきたが、彼は脚を交え臥したまま起きず、奴客を呼び、おいださせた。諸王は怒つて帝に上言したので、丁は獄につながれたが功臣の子というのでやがて釈放された。

官吏もまた多数ここに住んだ。かつて袁紹の時代に魏郡に兵変あり、それを聞いた袁の陣中の諸客で鄴に家ある者皆心配し色を失ひなきだす者もいた。（英雄記）魏の国都が洛陽に移つてから、ここは冗散の官吏の住む所となつた。（魏略、董遇伝）213年、曹操は魏公になり、216年、魏王に進み、王世子の丕が父に代り鄴に常駐した。郊外には王公の遊猟地がひろがり、彼は旦に出で夜かえるという有様で、彼の「失題」という詩に、「巾車、鄴宮を出で、校猟す東橋津」とあるが、棧潛（魏志二五・高堂隆伝）や崔琰（同一二）らの諸臣がしばしばいさめた。それは変事の発生をうれえたからで、父王が漢中征伐の不在中、城民魏諷が乱を起したことがある。都市の住民たる城民が都市支配者の圧政に抗して乱を起すことは六朝にかけて史書に散見する。

鄴は魏王国の都なので、曹操が洛陽で死去すると司馬懿らは梓宮を奉じてここへ還つた。229年になり洛陽に剝しい宗廟が建つたので、太帝韓暨は使となり神主を鄴から移し迎えた（魏志二四）。魏帝国ができてからも宗室妃嬪は洛陽とここを往復し、例えば明帝の愛を失つた虞氏は退けられ鄴宮に還つたし文昭皇后（袁紹の子熙の妻で曹丕が自分のものにした甄氏）の廟も237年まではここにあつた。264年、魏の亡びる時にも諸侯王みなここに住んでいたので、晋の武帝は北中郎将山濤をしてここに鎮し不測の変に備えしめた。（晋書四三）魏初、この地は県戸のうち数万が都下にあり、不法多きを以て文帝は賈逵を令とし月余にして太守にのぼした。（魏志一五）

左思の魏都賦（文選六）水経注一〇等によると、鄴には七門（南三・北二・東西各一）あり、東西七里・南北五里ある。城の中央北部に文昌殿を含む北宮あり、左（西）は中朝（大司馬侍中散騎等の官庁）右（東）は内朝（聴政殿）内朝の後（北）に妃嬪の住む椒房、永巷の甲乙舎がある。

宮門は東西左右南北内外、対称的に開かれ（洞達）その間に丞相（曹操は漢の丞相であつた）諸曹がある。文昌殿の西は都の西北高地に連り、氷井・銅雀・金鳳（金虎）の三台あり閣道を以て北宮の諸殿と通ずる。城を西へでると魚梁釣台などの娯楽施設のある玄武苑があり、ぶどうの実がたわわである。城内は官署と里閭と相交り、漳水の支流、長明溝が流れている。宮城南門（司馬門）をでると道東に長寿・吉陽・永平・思忠など貴人の住宅地があり、宮城の東に戚里（外戚のすむ所）がある。西城には白蔵庫あり財物をたくわえ、市況もさかんである。石苞が県吏となり、鄴に到り鉄を買い市長趙元儒に知られたことが徐広晋紀にある。鄴の経済は周辺の農田で支えられ、鄭渾が太守の時に、農政に意を用い、果樹をうえさせ村落齊整一の如く民、財を得、用足りゆたかになつた。（魏志一六）商業的に関係深いのは上党（山西東南辺）で、ここの材木をきりだし宮室に供したり（同一五梁習伝）曹植が人をして鄴に到り上党の布五十疋をかい車上の小帳帷を作らしめようとしたが謁者にきかれなかつた。（陳思王集、作車帳表）ことがある。

要するに、魏の時、鄴は大都市としての形を充分にそなえ、城内人口も十万前後あつたであろう。

西晋の時、鄴は東方の要地で宗室諸王（例えば晋書三七、彭城王權、高密王泰）が都督鄴城守諸軍事として駐在し、奚官（官奴隷の役所）がおかれた。299年、成都王穎この地に都督となるや、鄴の人張承基の妖乱あり、また王の軽卒な行動が八王の乱をここにも波及させた。306年王は殺され、翌永嘉元年代つて赴任した新蔡王騰はその年五月に馬牧師汲桑に殺され、鄴宮火にあい死者万余、婦女珍宝がかすめられた。これが第一次の打撃である。308年、汲桑の部下であつた石勒が胡漢の流民軍をひきい河北をあらし鄴を攻略、ほこをかえして洛陽を陥れ河南を席巻し、江南をねらおうとしたが、幕僚張賓が「鄴に三台の固めあり、西は平陽に接し、四塞山河、喉衿の勢あり」と進言したのを容れて冀州の平定を欲したが、晋将劉演（琨の兄子）流民軍をひきい三台の険を守つて降らず、張賓は石勒に、北方の邯鄲か襄国（以北邢台県西南）が形勝の地なれば拠るべしと勧め、後者がえらばれここに隔城重柵をきず

き、晋軍を防いだ。313年（建興元）になり従子石虎をして改めて鄴を攻めて成功した。始め羯人で旧来の同志桃豹を魏郡太守に任じたが、風俗殷雑の地であり、降服した三台の流人の安撫にこまり、晋の元官吏の趙彭を任ぜんとしたが、彼は固辞し、石虎が選ばれ三台に鎮することとなつた。百キロへだてて襄国と鄴とは後趙の二都となつたがそれは石勒に対して石虎が独立を主張しようとする傾向を反映している。石勒は平原の烏丸や山西の晋人や、旧部下を襄国に移住させ、前趙劉曜の都、平陽を陥るや、旧晋室の渾儀・楽器を移置して大いに経営に努めたとはいえ、鄴又は洛陽に都を遷す計画はもつていたらしい。ただし晋書載記に330年、臨漳（西晋建興初改名）に都すとあるのは通鑑考異により誤りとされた。一方石虎は石勒が端拱指授している間、自ら矢石に当り大趙の業を成し（晋書一〇六、彼の言）石勒はその勢をいみ、世子名弘を魏郡太守とし、六夷・五十四営禁兵万人をすべしめ暗にこれにそなえたが、330年石勒死後、石虎は後趙の実権をにぎり、334年自立した翌年、鄴に都をうつした。晋の国子助教陸翹の作という鄴中記に彼が鄴の経営、宮殿の増築につとめた様をのべるが、この書の一部に北斉時代のことがまぎれこんでいるのは唐の馬温の鄴郡故事の文の混入である。

石虎は中原にはを唱え鄴都をかざり三台を増築し、また秦の阿房宮、魯の霊光殿にくらぶべき東西太武殿を造りぜいをこらした。洛陽の翁仲・飛廉などの装飾を労費をいとわず運ばせた。この大工事に多数の晋人男子を苦役し、女子はでき上つた宮観のかざる宮女に徴発された。しかし万一にそなえる用意を忘れていないことは、銅省台の基部の命子窟に財宝飲食を貯え、氷井に天然氷と石墨（石炭のこと、陸雲の与兄平原書に曹公が数十万片を蔵したことが見える）とを蔵し、あなぐらには塩窖・粟窖もあつた。一方遷都の際一般人民はききんに苦しみ石虎は富家に飢民の救済義務をおわせ、地方官に救荒食をさがさせた。二石（勒・虎）の時代、仏図澄の感化でたくさんの仏寺が建ち、城中にも鄴宮寺などあり華北宇教の中心となつた。石虎死後不平漢人をひきいた石閔が城内胡人三十万を殺したことで城民の民族構成の二元性が知られる。成漢の李寿が使者を鄴

に派しその制にならい成都城中に水を引き入れたり宮観をととのえた（晋書一二一）ことで、羯人の修成した鄴の国部プランが地方に影響を及ぼしたことが判る。最後に鄴と襄国とを結ぶ街道に四十里ごとに一宮を立て夫人一人づつを侍女や宿衛と共に住わせたことは、この記事の示すごときおごりの事だけでなく、後趙の国家が二都を結ぶ幹線を軸としていたことを考えさせる。三国六朝の諸国家が政治上の首都と軍事上のいわば副都とを結ぶ交通幹線を整えた先例には劉備が成都と漢中を結ぶ道路に館舎亭障四百余区をつくつた（蜀志）ことあり、鄴についていえば魏の時は洛陽と、北斉の時は下都である晋陽との交通が重要であつた。南朝諸国家の建康と武昌または江陵などとの関係も、荊・揚二州の国家全体における役割に拡大させて考えられる。

後趙の後、鄴は前燕の都、前秦・後燕領となり慕容徳は後燕の末、この地の四万三千戸と車二万七千乗とをもつて滑台（河南省）にうつつた。（十六国春秋輯補五八）北魏では相州治となり、かつて崔光が孝文帝に勧めた遷都の夢は東魏孝静帝の時、この地から起つた軍閥高欽の実権の下に実現した。鄴城には鄴・臨漳二県治がおかれ、旧城民は城西百里に移され、新たに洛陽から移つた民を城内に住わせその中には代遷の鮮卑戸も多く、京城四面諸坊の外三十里内を公田としてかれらに給した。洛陽の宮殿をこわして鄴に運び南城周り二十五里を増築し、漳水に長隄をつくり、また渠をうがちかんがいに用い碾磑がすえられた。（北斉書一八・北史五四・高隆之伝）文宣帝は三台を増築しその高楼は遠くから望見された。後主の時に三台は大興聖寺に寄進された。文宣帝以後、土木と軍事の費用かさみ城民に店肆の税が課せられた。一般民のくるしむ反面に権力者やこれに寄生する分子のしやしが高まり風俗華美になつた。当時、晋陽との交通が盛んで、寒食の如き風習が鄴の方へ伝わつた。北斉の時繁華だつた鄴は北周が北斉を亡ぼすときと（577）、北周の時尉遲迥がここにより反し楊堅に亡ぼされる時、（580）建築物の破壊と住民の移転とにより大打撃をうけ隋以後は見るかげもなくなつた。

二　遊牧民族の国都経営について

六朝の時、著しいのは北方遊牧民族が中原に入りこんで農業民族である漢人を支配するや草原の生活様式を変容させつつ漢族の都城生活をとりいれたことである。即ち五胡民族の建都、―それは漢族により立てられ、のち荒廃した都城を修復したものであるが、新しい胡風も多少とも加わつている。元来漢民族は城を造る民族であつて、その開拓の路線は城郭の分布によつてたどられる。この城郭国の北方に「水草を逐うて遷徙し、城郭常処、耕田の業なし。然れども亦各々分地あり」（史記匈奴伝）といわれるごとき「行国」があつた。中国に接する地帯の半農半牧の民族は城居をまなぶに至る。今の甘粛省慶陽を中心にした義渠国は初め山谷に分散していたが秦に亡ぼされる時には二十五城を有していた。後漢書西域伝には国名の下に城に治すと書くものと谷に治すと書くものとある。後者はいわゆる「山谷に因りて城池となし、水草に因りて倉庫となす」（史記匈奴伝漢昭帝の時、文学の臣の議）康居国の如く冬は楽越匿の地、即ち良好な牧地に、夏は卑闐城に到るものもある。長城を境として北に引弓の国、南に冠帯の室あり対抗し、その戦法も、前者は「頭別衝突し乍ち出て乍ち入り堅戦する能はず」（北史高車伝）後者は「井をうがち城を築き楼を治めて穀を納む」（衛律が単于に献議した言、漢書匈奴伝）という機動性にとむ野戦と守城または八陣の法の如き陣地戦（北史刁雍伝参照）との差があつた。

遊牧民族が城に居ることになれずこれを却つて危険視するに対し、農耕民族が堅固な城により防備を一部の兵隊にまかせて安心している相違と、しかも遊牧民族の社会の内部発展により強力な氏族の族長を中心とする公権力が生じ、族長が primus inter pares の状態から専制君主化し、多数の附従者・奴隷を一手ににぎり、農耕民を征服しその都市を占領し、ゆたかな物質文化を享受するに至る過程は東アジアでははつきりとはまず五胡の社会において見られるが、西アジアについてはイブンハルドウンの実例の書（世界史序説第二巻第四編「村落・町・都市、その他定住民の居住地、及びそこに現われる状態、予備的及び補足的考察」においてのべている。それは東アジアの事情にあてはめくらべてみて興味深いものである。

帝国が確立されて都城ができる。漂泊民の中に幸福と休息のえられる定住への欲求が生じ、不充分であつた文明状態を完成し、荷を下す場所を考える。隣敵を防衛し、寺院・殿堂を建て都城における静穏と安楽をうるためには君主が強い権力を集中し、強制徴発にせよ報酬を与えるにせよ多くの労働者を集め、技術を用い、材料を運び、健康によく水源・用材・燃料・牧草のえやすい位置をえらんで、数代かかつても大都市を造ることを要する。都市の規模や繁栄は王朝のそれと比例する。人口は善政によりふえ、悪政によりへるが、都市人口の減少はまず周辺の山岳や平原民により補充される。この人口流入がつきると都市を守る壮丁なく市民も逃亡し、この都城を建てたとは別の民族が代つて主人となる。後者は既存設備を補足し新しいものを附加し、他の城郭都市により抵抗する敵人をたおすためにその屈強のより所である都城の破壊を行う。しかしらくだをかう遊牧アラブ人は都市経営を得意とせぬ。宅地や有蹄類家畜の牧場を考慮にいれず土木建築の技術が乏しく、穀物を交易で獲ることのみを考え耕地を近くに開かなかつた。遊牧民がアサビヤ（氏族精神）を堅持した間は山上の小村に住むに甘んじるが都市生活をつづける中に血統の純粋を失い貴さを忘れ名目上の家柄のみをほこる。宗教心にみちた時は素朴で正常な生活基準を守り、粗末なごつごつした都市に住むが、奢侈の心がめばえると都市は美化されるが国家衰え、結局都市も滅んでしまう。

この一般的陳述を東アジアで証明するごときは魏晋時代の胡族の都市建設である。北魏を立てた鮮卑拓跋部の前史をみれば遊牧民の都城生活へ移る際のかつとうが伺われる。魏書世紀に宣帝推寅の七代の孫、献帝隣（推寅ともいう）が神人の告により都邑を立てんとし、位をその子聖武帝詰汾に授け、高深の山谷をめぐり匈奴の故地にでたという。檀石槐（135―180）に服属した西部大人の一人として魏志に見える推演はけだし献帝に当るものか。軻比能が三世紀初、鮮卑を再統一し三国の乱をさける中国人を収容し漢文化を採用した後をうけ、詰汾の子、神元帝力微（220―277）は258年定襄の盛楽により、その孫、猗盧は313年に盛楽及び平城に漠風の城をきづき、その行

動も専制君主的であつた。317年立つた平文帝欝律（力微の曽孫）も漢化政策をとり、東晋に欵を送り中原の耕地に進出せんとした。この二代の頃、猗盧の兄、桓帝猗㐫の皇后惟氏一派は保守的で、平文帝を殺し、惠帝賀傉を立て、東木根山に本拠をうつした。平文帝の子、烈帝翳槐はまた漢化政策をとり、石虎の都の鄴に兄の昭成帝什翼犍と滞在した経験もあり、盛楽故城東南に新しく城をきづき、また諸大人を誅する専制的行動があつた。339年、代王の位についた昭成帝が盛源（山西朔県）に都せんとするや母后王氏は「わが国は上世より遷徙を業とす。今事難きの後、基業未だ固からず。もし郭して居らば一旦寇来るともにわかに遷動しがたし」と反対した。これを見ても拓跋部内では保守――遊牧生活礼讃――諸大人合議――郡城嫌悪と進歩――農耕生活への志向――専制君主――都城建設の二潮流がからみあつている。昭成帝一代も結局この二派の争いに終り、国人の絹への需要高まり、品不足になやむという顕著な漢化のあとを見るのである。かくて代国は一時独立を失い前秦の治下に入つたが、これを復興した道武帝珪は平城を経営し国人や慕容部等の雑夷、漢人の百工伎巧や農民、吏人を移住させ、遊牧民にも畿内の田を分給した。南齊書魏虜伝に胡族の都、平城のさまをくわしくのべるが、いろいろ建築が進められているにも拘らず、宮城に楼・女牆はあるが、門に屋なく城に壍なく、天子・皇后・妃妾の居所や倉庫は土屋である。ただし食糧をたくわへる窖は八十余あり、一所に米と穀と半々に四千斛を収めるという。異る種族や身分の者が居住しているので治安対策はゆきとどき、王公や富める庶人に隷属しその戸内に住む工巧はその主人に申告を命じ、姦民（太武帝の時には沙門巫師も含む）混入を防いだ。士庶により居住地の区別があつたことは、南朝の建康で士庶同伍が問題になつたのと対照的である。六七十乃至四五百家は一坊をなし、坊に巷あり、常に捜検を行い、宮城三里内にすみ、軍戍に属しない民は蘭台中丞御史の監督をうけている。

孝文帝の太和十七年（493）の洛陽遷都は実に遊牧民の都城民化を完成させたものである。永嘉五年（311）以来、洛陽は官署里閭、鞠（きわ）りて茂草となり、長安の様に五

胡の都として修復されることもなく、わずかに西北隅の金墉城（西晋時代政治犯の収容所として倫敦塔のそれにもにた歴史をもつ）が南北の勢力の争点となつていた。孝文帝遷洛の理由は平城による鮮卑旧勢力の一掃、明元帝の時、寇讃之（天師寇謙之の兄）が河南三郡をひきい降つてから魏領として確保されたこの地を都にすることにより南朝を圧迫すること、即ち精神的には漢文化の全面採用、物質的には農耕国家的体制の整頓、であろう。帝のこの意志に対する反動は、「冬は南に居り、夏は北に還る」と帝が言つたというわさの流布、世宗の時にも還北の流言あり、洛陽の代人が田地家屋をうりはらつたこと（魏書一五元暉伝）などに現われる。494年、韓顯宗の洛陽経営に関する上言に、道武帝の制を守り、士庶を雑居させず、風教を維持せよと言つているのは、都市文明の害悪が強く感ぜられてきたことを知る。また当時平城においても鮮卑人富室のおごり甚しいと彼はのべている。

北魏の国都経営と漢化と国俗喪失の過程をもつと速くすませたともいうべきは夏の赫連氏の場合である。

赫連勃々の曾祖父の劉武は四世紀初め山西省沂県西に当る肆盧川に居り劉聡から宗室の待遇をうけた。その孫、衛辰は符堅に属し377年頃、代東城（綏遠東勝）に屯し、乞伏・禿髪など河西鮮卑の諸虜を督した。勃々も後秦姚興に属し高平に鎮し三交城（綏遠巴彦和碩附近）の五部鮮卑・雑虜を管理した。つまり赫連氏は部族組織は保つていたが、前後秦の如く既に中原を占有し城郭生活を採用している国に附属し、その治下の諸遊牧民を監督するべく城を与えられていた。衛辰は符堅に用地を求め春去り秋来るを約したというから移動的農業を営んでいたらしく、城居を必ずしも利としない。故に勃々は406年自立し姚興に反旗を掲げた時、諸将が「険を固めまず長安をとり、山川沃饒の高平に都せよ」と説いたのに対し、「もし専ら一城を固めたら敵は力をあわせ攻めてくるから我はかなわない。もし雲騎風馳その不意に出で、前を救えばその後をうち、後を救えばその前をうち、敵をして奔命に疲らせたらきつと勝つ。昔、黄帝も二十年遷居常なしといわれている」と答えた。勃々の機動遊撃部隊ははたして後秦の領土をあら

しまわり城門ひる閉すという有様であつた。しかしその結果えた敵の捕虜を収容するのに朔方の大城その他の城を利用し、413年に至り、今の楡林西方の塞外の地に統万城を建設し、劉を改め赫連氏を称し418年、長安を占領し南台をおいた。統万城は彼の死後、北魏太武帝におとされたが、城の高さ十仞、基厚三十歩、上広十歩、宮牆五仞、丹青をかざつた飛閣連つていた。太武帝が小さい国で立派すぎる城をつくつたのが滅亡の因だと言つた如く、赫連氏の建都と興亡とは遊牧民盛衰の好い例である。

鮮卑慕容氏の場合は一層ゆるやかな過程をたどる。慕容部は大凌河と濡河（濡水）下流域の間により、北に接して段氏、その北に宇文氏がいた。294年、慕容廆が大棘城によつてから農桑にならい中国風の法制を定め、宇文部の来攻に対し堅守して退けたといい城居になれてきたことが判る。あたかも西晋末の乱をさけ漢人が遼東方面に来住し、彼は東晋の都督遼左雑夷流人事という官号をうけ、流民の出身地により郡を立て安住させた。漢族の関外移住が鮮卑に城居を教えたこと想像にかたくない。333年、廆死し子の皝が立ち、宇文部をうち楡陰・安晋二城をきづいたが、この頃、段氏もその東境に乙連城をきづき、慕容氏の柳城（朝陽）を攻めるのに飛梯地道をつくつたといい、全く漢人の戦法を用いている。337年、燕王を称し、柳城を攻め龍城とし342年、ここに遷都した。漢人陽裕をして宗廟宮闕を建て、江南の桑種を輸入し、牧牛を貧農に給し、新附の民を周辺にうつし国都の経済の基をたてた。350年、その子の儁の代に薊城を都とした。357年、後趙の内乱をみてとり鄴に遷つた。鮮卑胡羯三千余戸は和龍（龍城）からここにうつり、銅爵台を復旧し一族のため小学を立てた。

慕容氏の建てた国では、ほかに後燕（慕容垂）が中山。龍城に、南燕（慕容徳）が広固に、西燕（慕容永）が長子（山西）に都しているが、これら乱離の間、主権者の移動に伴い城に住んだ族人や一般民もついて移動し、新たな都城に入るという様に都市人口の流動混和がはげしかつた。そしてその間に北族の純血がみだれ部族的統制もとれなくなり慕容氏は全く漢文化の中に没入してしまつたらしい。

五胡時代に河西・隴右の地は夏・西秦・五涼の七国のめまぐるしい抗争の地となつたがその中心は姑臧（武威・涼州）である。云うまでもなくこの地帯は甘粛省とそれを南北からかこむ青海・寧夏の三省で、モンゴル・トルコ系の草原遊牧民とチベット系高原遊牧民の交渉する所であり、かつ中国と西域との通廊として商業上の要地である。姑臧は「其城本匈奴の築く所なり」（晋書八六・張軌伝）といいまた「秦の月氏戎の拠る所、匈奴これを蓋蔵城という」（西河旧事）とある如く、漢族の建てた城でなく、頭尾に両翅の如き角があり方形でない。西秦末、張軌ここに拠り、その曾孫駿は涼王となり、城外四面に四城をきづき二十二門あり、南城の謙光殿は五彩でかざり金玉の珍巧をきわめ、殿の四面にさらに四殿をつくり四季ごとに順々に遊幸したという。溝渠通じ水利よく良田あり、倉庫に米を貯えききんには放出した。前涼滅びてのち後涼の国都になつたが、その末年、後秦・沮渠（北涼）・禿髪（南涼）の侵入をうけ、ききんに苦しんだ。しかし河西一都の会として形勝の地を占めていることは、南北涼がこの城の奪取を争つたことで判る。沮渠氏は強い氏族精神を保持しつつ城塢の利用にも早くからなれていた。禿髪氏も四世紀末には部族が農桑に従い、廉川（西寧の西）・楽都（碾伯）・西平（西寧）に城居し利唐孤の時に姑臧を占領した。しかしこの時、将軍鍮勿崙が「昔は城邑なくて天下に威を振つたが、今や楽土に寧居し、倉府の粟帛は敵人の志を生ぜしめる。晋人を諸城におき農桑を勧課し軍国の用に供せしめ、われらは専ら戦法に習い、敵強ければうつりてその鋒をさけるがよい」といつたが典型的な遊牧民支配者の考え方である。それが傉檀の代になると、楽都に大城をきづいて「王侯設険以て自ら固むるは先王の制にて人を安んじ衆を衛り不虞に預備する」と漢族の古典をひき弁明している。これに比すると西秦を建てた乞伏氏は河谷や山岳を転々し、国仁・乾帰の時、苑川・勇士二城によつたが、この城をうばわれてもなお部族団結を保ち、度堅山により附近の牧地を支配し、再び勢力をもりかえすと都城を攻略し、郡県の漢人や征服した他部族をここに移住させ、城居の安全を欲した。

ようするに、三国六朝の頃、漢族社会内部の混乱に加え

て北西遊牧民の侵入が中国の都市の個々の盛衰に対してはもちろん、都市の機能や城民生活の様相にもかなり影響を及ぼした。為政者の意思のままに千里をこえ異郷の城郭に収容され、または農村をすて安全な城壁内に流入した漢胡の人民はくりかえされる移動の後、地域を共にする城民という集団を形成した。本論では言及しえないが、建康や長安などの例から見て城民は何ら市民的自治はもたなかつたが、いわゆるおひざもとの民として田野の民にはない恩恵をうると同時に特別な負担をも有した。漢代の里という都市農村を通ずる集団が、後者では村とよばれたごとく、前者では坊とも俗称される様になつた。（洛陽伽藍記）坊とは治安維持の必要からきづいたかきを指す。292年、長安令に赴任した潘岳の西征賦（文選十）に当時の長安が街里蕭条、邑居散逸、市場も倉庫も役所も貧弱で城の片隅に集り、それでも都中は雑踏し、蛮夷の士女がひしめきあつている様をのべ、漢代の栄華と整斉を幻のごとく回想し、長安の没落は政治の失敗にあると断じ、自分は都市復興の才能はなく、ただ無欲の心を以て政にのぞみ罪を免れえばよろしい、礼楽の如きは将来の賢者を待望するのみと結言している。彼の待望はけだし漢文化の伝統と胡族精神の貫入とを総合した隋唐の都城経営により三百年後にこたえられたものであろう。

附記本稿、特に「二」は昭和二十三年度文部省科学研究費による研究の一部の発表である。

例会予告

六月六日（土）午後一時

於　陳列館第二教室

中国先史時代の一問題
――アンダーソンの甘粛六期について――
藤沢長治

初期庄園の経営
岸俊男氏

into humanity as well as in his deep self-consciousness. Indeed, this unique theory was inseparable with his originality, but, on the other hand, we have to admit that the orthodhxy doctrine had showed its sign of decline even in the school till the age of Genroku when the stream of criticism began to flow.

It is quite natural from his doctrine that he criticized the anti-social and impractical side of the orthodoxy, but important is the mood that challenged the dignity of the preceding theory. Such was the intellectual world around the Genroku era, and herein lies its historical significance. In this article, however, our view is mainly concentrated upon the theory of Sato Naokata.

Chinese Cities down to the Seventh Century

T. Miyagawa

The object of this essay is to describe the general traits which characterized the Chinese cities from the fall of the Ch'in-Han Empire down to the unification of the country in the Sui-Tang period. First, in spite of the several attacks by the northern nomadic races, such old, great cities as Chang-an (長安) and Lo-yang (洛陽) still witnessed their prosperity even under the alien sway. Indeed, their thriving pararelled with that of those cities like Yeh (鄴) and Chien-k'ang (建康) which were mere local towns in the Han period and dashed into reviving with the advent of troubling ages. Second, each state of those days had two principal cities, one of which was the capital and the other the military center. The transportation facilities were opened between the two cities and stimulated the economic and political organization of the state. This system of the two capitals seems to be a result of the antagonism between the seigneurs and the military government of the day. Lastly, with the coming of the nomadic races and many civil wars accompanied with it, the city government and the city life were faced with great changes. Some of the aspects will be illustrated.